

家事・育児に関して妻が担う潜在的活動の内実と過程

——妊娠・育児期の女性への聞き取り調査から——

三品 拓人・妹尾 麻美・安田 裕子

(大阪大学大学院人間科学研究科・同志社大学文化情報学部・

立命館大学総合心理学部)

家事や育児には不均衡な状態が存在することが指摘されてきた。妊娠期や育児期ともなれば、なおさら女性に偏って困難やコンフリクトが生じることは想像に難くない。本稿は、家庭において夫が育児や家事の分担に参加する背後にどのような妻の活動があるのか、内実と過程を検討した。

妊娠期・育児期の女性23人への聞き取り調査からは、妻が行っている潜在的活動が明らかになった。夫が家事や育児に参加しているように見える背後に妻の働きかけが存在した。例えば、夫が家事を円滑に行うために、妻が準備や指示、後処理をしていた。育児においては、出産時や出産後を見越して夫と関わり、子どもの育児をうながすような配慮を行っていた。このような活動が続く中で、出産や育児をきっかけに以前より少しずつ夫が家事・育児を遂行するようになることや夫婦関係のあり方の変化が妻によって語られた。全ての夫が変わるわけではなく、その場合、役割が固定化されたり、妻が諦めたり合理化するようなさまも浮かびあがった。

キーワード：妊娠期，女性，家事，育児，潜在的活動

立命館人間科学研究, No.43, 1-16, 2021.

I 主に女性に担われてきた家事・育児と 夫の参加

本稿の目的は、「妊娠期の女性の語りをもとに、育児や家事がなされる背後にある妻の労働の内実とその過程を明らかにすること」である。

近代資本主義社会において、再生産労働は市場労働と切り離されてきた。再生産労働とは、家事、育児、介護などをはじめとし、市場における労働力それ自体を再生産するような労働のことである¹⁾。こうした労働は、私的領域でも公

的領域でも女性に偏ってきた。戦後日本では女性の雇用が進んだが、多くはフルタイムではなくパートタイムであり、たとえフルタイムで就業しても、依然として再生産労働にも従事しなければならなかった。そのため、女性にとって、共働きの場合であっても再生産労働は日中の仕事に続く第2の仕事、つまりは「セカンド・シフト」(Hochschild & Machung 1989=1990)と呼ばれる状況が生じている。また、女性の就労によって仕事役割と家族役割が相互にぶつかりあうことを意味する、ワーク・ファミリー・コンフリクトという概念も提唱されてきた。これらは現代の日本の様相にもよく当てはまる(内田・斐 2016)。

家庭内における夫婦のサポートについても研

1) 「再生産労働」は家事、育児、介護などの生命をつなぐ労働の定義として、第二波フェミニズムの中で登場した概念である。背景には第二波フェミニズムの中から登場した家事労働論の問題提起がある(伊田 2012: 114)。

究がなされてきた。家事・育児に従事する時間が女性に偏っているだけでなく、夫婦間サポートについては以前から大きな性差の存在(サポート提供量は女性の方が多い一方で、結婚満足度は総じて女性の方が低いこと)が指摘されている(筒井 2016)。妊娠期や育児期初期ともなれば、なおさらこの差が女性に偏り、困難やコンフリクトが生じることが想像に難くない。

一方、政府は男性が再生産労働に参与することを推奨している。イクメン、カジメンなどの言葉に見られるように、目指される男性のあり方も変わりつつある。こうした背景から、近年では、夫、父親による家事・育児の参加が注目されて研究も蓄積されている(例えば、巽 2018; 大野 2016 など)。家父長的な「夫」像は変わりつつあり、固定的な性別役割分業意識に肯定的な意見は少数派となった。

Ⅱ 家事・育児の見えない労働の可視化

本稿では、家事・育児をめぐる一見、対等になりつつある夫婦の中で非対称な問題が存在していることを検討する。そのために、まずは女性が家庭内でどのような労働に従事してきたのかについて、先行研究からとらえられる課題を提示する。

1 家事・育児のジェンダー非対称性

夫婦の家事・育児に関する統計的な研究では、主に次の2点が指摘されてきた。

1点目に、女性と男性で家事・育児の遂行量が非対称であることである。例えば、2008年に行われた全国家族調査では、妻の買い物は平均週4.5回、洗濯が6.2回であるのに対し、夫は週1回を下回っている。経年で比較すれば平等化の趨勢が見られるが、その変化はわずかであり(乾 2016)、父親の育児参加度についても10年間で増えていないことが同調査によって確認

されている(松田 2016)。それに加えて、夫のサポートが育児期における妻の負担感を軽減するのにそれほど役立っているわけではないことも報告されている(鈴木 2016)。2点目に、遂行している家事・育児の具体的な内容も夫婦間で大きく異なることがあげられる。夫が担う家事はスキルがそれほど必要とされず、自分の都合に合わせて遂行できる内容であることが指摘されている(筒井 2011)。加えて、夫の家事時間が増えることが必ずしも妻の家事時間を減らすわけではなく、夫の家事は妻の家事との連動性・代替性が極めて低いことも明らかになっている(筒井・竹内 2016)。これらは、夫が自身のスキルで遂行できる家事内容、自分の好みにそった家事内容を選ぶことができることを意味する。家事より夫の参加度が高い育児においても、夫は時間がある時に子どもと遊ぶことは増やすが、着替えさせたり、食べさせたりするなどの世話や叱るという面でのしつけは少ない(大和 2008)。

こうした家事・育児分担において夫婦間で差が生じる過程について、各家庭内でのそれに着目し、権力概念を用いて説明されてきた。孫(2019)は、協力関係にあると思われる家庭で、家事・育児の分担と調整が行われるプロセスにおける夫と妻の権力経験を把握し、いかなる権力作用によって女性が家事・育児の主な担い手として維持されていくのか、夫婦への聞き取り調査から明らかにした。夫婦間において、「対立や争いをさけるために、あらかじめ相手の反応を予測して自身の願望を抑圧する潜在的な権力」(Komter 1989)がある。孫の調査で描かれた次の例に当てはまる。かつて夫との家事分担の交渉に失敗した経験や第一子の送迎をやむを得ず祖父母に依頼をした経験を重ねる中で、夫との交渉や対立を回避し、自分にありうる選択肢の幅を狭めてしまった。その結果、妻が自発的に家事・育児を担い、夫を支える立場になる過程

が描かれている。または、夫が役割分担に協力的であっても、出産を期に妻が産休や育休を利用することで、結局のところ妻が不可避的な育児役割を担うことが多い（孫 2019）。

全国調査データと重ねてみるならば、夫が家事・育児を遂行しているように見えても、実際には、家事の内容や水準が異なり、他者への依頼も含めて背後にいくつもの労働がある—多くの場合、女性が担っている—と考えることができる。これらの問題は、非対称ながらも夫婦で分担をすることになったからこそ生じることとなる。さらに穿った視点を取るならば、夫が家事・育児を遂行しているように見える背後にどのような活動が存在しているかを見ていく必要がある。このような視点を次節Ⅱ.2で説明する。

2 家事・育児遂行の内実と過程の解明に向けて

家事・育児のみならず、家庭内で必要とされるいくつもの労働の実態を可視化するために、様々な概念が提示されてきた。以下では、感覚的活動、および新家事労働を整理する。

家事・育児などのケアが成り立つ前提として、感知、思考を通して潜在的に行われる活動は感覚的活動（sentient activity）として概念化されている（Mason 1996; DeVault 1991）。感覚的活動とは、他者の状態や状況を注視したり、他者には何が必要かを見定めたりするなど、観察や推論を含む理知的な営為のことを指す。つまり感覚的活動は、家事・育児という労働を成立させ、維持するために必要な「目に見えない営為」（平山 2017: 38）である。

従来の家庭内労働に対する「新家事労働」という概念も、可視的な活動を支える「目に見えない営為」の存在と類比して捉えることができるだろう。「新家事労働」とは、家庭内で日常的に生じるニーズを満たすために必要な、生活に関連する諸機関とのやり取りのことである（Thiele-Wittig 1992=1995）。ティーレビッツは、

そのように世帯に提供されるサービスの増加が新たな負担を発生させ、必ずしも家事労働が減少しないことを指摘した（Thiele-Wittig 1992=1995）。日本においても、保育所の入所手続きという視点からの「新家事労働」の研究がある（尾曲 2014）。この研究で指摘されたのは、保育所を利用することでたしかに子どもを直接相手にするという意味での育児の負担は減るが、入所手続きや送迎をはじめとする、保育所の利用自体を成立させ維持するための手間はかえって増え、直接的な育児とは異なった負担が生じているということである。

このような見えにくい負担について、平山（2017）が息子による介護の文脈でヘクエンボーグとブラリアの研究²⁾を踏まえて指摘したとおり、家事を平等に担っているような分担状況においても息子は女きょうだいの「不断の働きかけという『お膳立て』の上に成り立っている」（平山 2017: 93）のである。実際に、育児期の家庭における、家事・育児に関する目に見えにくい活動について示しているのが青木（2019）の研究である。青木は夫婦の家事育児分担割合と、その調整過程における納得度および説明づけとの関連から検討を行った。その結果、妻側に家事・育児の負担が偏った分担の現状がありながら、職業の有無にかかわらず納得しているという評価をする傾向が認められた（青木 2019）。その納得の説明として、青木は「夫はもちろん妻さえも自覚的でないとすれば、可視的な育児行為としての『おむつ替え』を（それを支える多様な家事・育児を妻に任せた上で）夫が分担していることは、夫にとっても妻にとっても『納得できる』家事育児分担状況であると認識されているのではないだろうか」（青木 2019: 40）と議

2) 老親のケアにおいて、娘の求めに応じて、息子が分担している状況についても、何をいつどのように行っているか、将来の状況や親がとりうる選択肢などを把握しているのは娘であった（Hequembourg and Brallia 2005）。

論を提起する。

これらの議論によって、仮に夫が家事や育児に参加しているとしても、夫婦のあいだには分担の不均衡が潜んでいるという視角が浮き彫りになる。

本稿では、このような家事・育児に関する目に見えにくい活動を潜在的活動とし、より負担が大きく、夫のサポートも必要とされる妊娠期の女性を対象に、その様相について明らかにする。具体的には、妻や夫による家事・育児遂行の内実と過程を検討する。

Ⅲ 研究対象とデータの特性

1 妊娠期・育児期の女性の位置づけ

夫婦の協力関係は高齢期や結婚初期、育児期など段階に応じて変わる。そこに、様々な問題や視角がある。例えば、「日本の調査結果でも、家庭内で家事を行う夫の価値観は多様であり、日々の生活の中で家事分担を徐々に行うようになる様子がうかがえる」(永井・松田 2007: 43)という指摘にあるように、結婚当初から役割などは流動的である。また、子どもができることなど大きなイベントによっても分担状況は変わるだろう。孫は自身の調査対象者について「結婚時点の家事は主に妻が担っており、子どもの誕生に伴い夫婦の家事育児分担が平等に向けて進んできたが、全体的に妻が主な担い手である傾向が確認される」(孫 2019: 113)と述べている。これらの引用からは、ライフイベントなどによって流動的でもあることが伺える。実際に、心理学における研究でも、家族に適應していく夫の変化が男性の発達として研究されてきた(例えば、大野 2016)。

妊娠期が家事・育児に困難を抱える時期であることは想像に難くない。そこでは、夫の配慮や家庭内の仕事も必然的に増えるとも考えられる。妊娠期において家事や育児が負担となるこ

とについては、看護学領域でも知見がある。例えば、妊娠週数がすすむことで妻がより疲労感を感じることで、家事労働によって就寝前には疲労が強いことや、家事労働が妻の睡眠時間に影響を及ぼしていることが明らかにされている(杉原・高橋 2013)。さらに、産後1か月健診を受けた初産婦のインタビュー調査では、パートナーの情緒的サポートに対する妻の思いという観点からの分析において、妊娠中に期待するほど関心を持ってくれなかったことや、産後に気持ちのずれを感じて、「もっと私に関心を持ってほしい」、「家事と育児の両立の大変さを(夫に)分かってほしい」という思いが示されていた(岡他 2019: 5)

そこで、妊娠期の女性を対象とし、夫の家事や育児、その他の労働を含めどのように語るのかをとらえ、妻が潜在的に担っている活動を明らかにする。

2 調査の概要

本稿は、立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構のプロジェクト「シームレスな対人支援に基づく人間科学の創成」(プロジェクト代表: 矢藤優子)で実施している「いばらきコホート調査」の一貫で行われた聞き取り調査のデータを用いる。いばらきコホート調査は大阪府茨木市において2017年10月から2020年3月末までの間、母子手帳交付時に調査協力者の募集を行ってきた。協力者登録が妊娠14週目以前の場合は妊娠14週目にwebを介した質問紙調査を、協力者登録が妊娠15週目以降の場合は登録時にwebを介した質問紙調査を実施しており、その調査にて聞き取り調査に協力可能と回答した女性(重度のうつ状態の者を除く)に調査依頼を行った。2018年2月から2020年3月まで、約25週目の妊娠期女性48人に調査が実施されている。主な調査者は第2著者であり、第1著者や第3著者が同席する場合もあつ

表1 協力者の概要

| 対象者 | 対象者の年齢 | 結婚歴 | 第何子か | 第一子妊娠前の就業状態（語りから推測） | 現在の就業状態 | 現時点での予定 | 妻親の現在居住地域 | 父親の現在居住地域 |
|-----|--------|------|------|---------------------|---------|---------|-----------|-----------|
| A | 30代前半 | 5年目 | 二子目 | 正規雇用 | 正規雇用 | 未定 | 府内 | 隣接市 |
| B | 20代後半 | 2年目 | 一子目 | 正規雇用 | 正規雇用 | 復帰予定 | 隣接市 | 関西 |
| C | 30代後半 | 9年目 | 二子目 | 非正規雇用 | 専業主婦 | 専業主婦 | — | 市内 |
| D | 30代前半 | 約7年目 | 二子目 | 正規雇用 | 正規雇用 | 復帰予定 | 府内 | 関西外 |
| E | 30代前半 | 約7年目 | 三子目 | 非正規雇用 | 専業主婦 | | 不明 | 不明 |
| F | 30代前半 | 3年目 | 二子目 | 非正規雇用 | 専業主婦 | | 近居 | 関西 |
| G | 30代前半 | 5年目 | 一子目 | 非正規雇用 | 非正規雇用 | 専業主婦 | 関西 | 関西 |
| H | 30代後半 | 6年目 | 一子目 | フリーランス | フリーランス | 継続予定 | 市内 | 不明 |
| I | 20代後半 | 4年目 | 二子目 | 正規雇用 | 正規雇用 | 復帰予定 | 府内 | 市内 |
| J | 20代後半 | 6年目 | 二子目 | 非正規雇用 | 非正規雇用 | 専業主婦 | 関西外 | 関西外 |
| K | 20代後半 | 3年目 | 一子目 | 正規雇用 | 正規雇用 | 復帰予定 | 市内 | 関西 |
| L | 30代後半 | 10年目 | 三子目 | 正規雇用 | 非正規雇用 | 復帰予定 | 関西 | 関西 |
| M | 30代前半 | 3年目 | 一子目 | 正規雇用 | 正規雇用 | 専業主婦 | 関西 | 府内 |
| N | 30代前半 | 4年目 | 二子目 | 正規雇用 | 専業主婦 | | 関西 | 市内 |
| O | 20代後半 | 不明 | 二子目 | 正規雇用 | 正規雇用 | 復帰予定 | 市内 | 不明 |
| P | 20代後半 | 3年目 | 二子目 | 正規雇用 | 専業主婦 | | 同居 | 関西 |
| Q | 30代前半 | 約7年目 | 二子目 | 非正規雇用 | 非正規雇用 | 専業主婦 | 隣接市 | 隣接市 |
| R | 30代後半 | 3年目 | 一子目 | 非正規雇用 | 非正規雇用 | 復帰予定 | 府内 | 不明 |
| S | 30代前半 | 4年目 | 二子目 | 正規雇用 | 正規雇用 | 復帰予定 | 市内 | 関西 |
| T | 30代前半 | 3年目 | 二子目 | 正規雇用 | 専業主婦 | | 関西 | 不明 |
| U | 30代前半 | 7年目 | 三子目 | 非正規雇用 | 専業主婦 | | 市内 | 不明 |
| V | 30代後半 | 10年目 | 三子目 | 正規雇用 | 正規雇用 | 復帰予定 | 関西 | 関西外 |
| W | 30代前半 | 4年目 | 二子目 | 正規雇用 | 正規雇用 | 復帰予定 | 関西 | 関西外 |

た。上記のことから、茨木市という大都市通勤圏で実施された調査であり、現在の環境において協力者が受ける公的なサービスの条件が一律であること、機縁法ではないため協力者の生活環境が多様であることに、このデータの特徴がある³⁾。

本稿では、2018年2月から2019年7月の間に聞き取り調査を実施した妊娠期女性35人のうち、家事や育児の分担状況について詳細が語られた23人の語りを引用している。表1に協力者の概要を示した。

聞き取り調査は、14週目の質問紙調査への回答（家庭状況など）を参考にしながら、妊娠期女性の生活を理解するために1時間程度、半構

造化インタビュー法で行った。調査のはじめに学校卒業後から現在の生活に至るまでのライフヒストリー（就職、結婚、出産など）を尋ね、続けて妻・夫の雇用労働や生計について、家庭内での家事の分担、（子どもがいる場合）育児の分担、必要に応じて、親族からの家事・育児に関するサポート状況について尋ねている。家庭内での家事・育児の分担に関するやりとりにて、具体的な夫の家事・育児の様子について質問した。

35人のうち2人は婚前妊娠であり、2人は家庭内にて性別役割分業が成立しており、家事・育児の分担が明確であった。また、4人は調査にて家事・育児分担について具体的に語られなかった⁴⁾。他方、当初から夫が自主的に家事・育

3) いばらきコホート調査に関する概要は、妹尾他(2020)に記載されている。

4) 4人のうち2人は第1子の妊娠中で家事は「でき

児を担っており、今の状況に特に不満がないという協力者が4人いた。このうち1人は外国籍であり、祖父母やベビーシッターなどに頼らず、親が家事・育児の責任をすべて負う「日本」の家事・育児に「びっくり」していた。

23人の語りからどのような分担を行っているかということ、そしてその状況にどのような不満をもっているのかということ把握することができた。

語りから、現在、基本的な家事（第二子・第三子を妊娠している場合は家事に加えて育児）としてどのようなことを行っているか、そして過去に妻の妊娠期に近づくにつれて、もしくは子どもが誕生してから夫がどのように変化したのか、また変化しない場合に妻がどうとらえているのか、などが分かる。なお、個人情報保護の観点から、論旨に支障をきたさない範囲で一部データの改変を行った。

IV 妻が行う潜在的な活動

本節では、家事や育児に関する語りから妻が夫に対して行っている働きかけをみていく。

1 家事に関係する潜在的活動

家事や育児は、必ずしも夫が自主的に行うだけではない。妻が準備したり、指示したりすることによって夫が担っていることが分かる。

(1) 夫が家事労働を手伝うための準備

結婚後から現在に至るまでの家事の分担についてみていこう。夫が行う家事としてゴミ出しの割合が高いというデータもあるが（滑田・サトウ 2013: 65）、本稿でも、結婚以降、ゴミ出しを担ってきた夫の様子が多く語られた。他の家

る方がする」といった明確な分担が行われていなかった。他2人はいずれも第4子妊娠中で、語りから妻が家事・育児を分担することが自明になっているよう推測された。

事と比較すると、一見単純そうに見えるゴミ出しという活動の背後にも妻による「お膳立て」があることが伺える（D, K, L, F, など）。

例えば、Dさんは、「なんかゴミ箱にゴミとかがたまっていたら、ゴミ捨てようと思いますけど、むこう（夫）は思わないっていうか気にしてないから『結局ゴミたまってるよ』とか言って動かすみたいなのところがあって」と夫がゴミに気づかないのだと述べる。さらに、Fさんは、「わたしが（ゴミを）まとめて玄関までセットした状態なら持っていってくれるんですけど、言わないとやってくれないし」と語る。このようにゴミ出しはゴミがたまっていることを認識することから始まる。また、ゴミ出しは曜日が決まっており、自身の通勤中に家にいる夫のスマートフォンにメッセージを送るKさんや曜日を細かく伝えるLさんのようにその都度ゴミ出しを夫に依頼することもある。

これらの語りからは、ゴミ出しという活動の背後に、ゴミ箱にゴミがたまっていることに気づく、ゴミを出す曜日を認識する、玄関までセットしておくことを伝えたり依頼したりする、などの一連の潜在的な活動が存在していることが伺える。

ゴミ出しは育児とは直接関係ないように見える。しかし、育児とも関係していることが次の例から分かる。Lさんは、ゴミ出しの曜日を伝えるのみならず「(子どもが)一緒にゴミを出したがるから、(そうしないと子どもが)拗ねるからよろしくね」と述べるように、ゴミ出しを出すという単純な行為の背景に子どもの存在と子どもへの対応が見て取れる。また離乳食などに関してもゴミ出しと同様に、「置いといたら手伝ってくれるけど、でも置いとかないと……(手伝わない)」というFさんの表現からもうかがえる。

こうした夫へのお膳立ては育児でも同様にみられる。例えば、第二子を妊娠中のSさんの場合、

妊娠期であるため第一子の送迎を夫に依頼しているが、日誌を書くなどの送迎に必要な準備を行うのはSさんであり、まさに「送迎はしてくれてるけど、お膳立ては全部わたしがしてるみたいな感じ」なのである。同様に、Vさんが「(保育園の)準備お願いねって(夫に)言っても準備どうやってするん？からはじまる感じなんで。今はこれいるの？あれいるの？みたいな、把握しとけよみたいな」と言うように、保育園の準備を夫がしていたとしても、それに必要な情報を把握しておく必要がある。

(2) 手伝いの指示

前項では、ゴミ出しの日時を伝える活動が見られた。このような活動は夫がゴミ出しの曜日を確認すれば不要なわけだが、「気づくのが遅い」という夫の状態への言及が多くとらえられた。それゆえに、妻が夫に指示を行う場合がある。その結果、典型的には「言ったらやってくれる」という状態になる(A, F, E, K, Q, U, T)。

夫に指示をしなければならない理由は、以下のような語りからうかがえる。Fさんは、「気が利かない人なんで指示をしなくちゃいけない。指示、ゆったらやってくれるし、わかってくれるけど、でも自分からは気づかない人なんで、いらっとしてる」と言う。

また、Kさんが「同じことを毎回ずっと『やってね』、『やってね』、『やってね』、『やってね』って言って、ある日言わなくなってもやってるけど。1回『これやって』ってだけでは、あの1回だけ。だから3回とか... (言わないとやらない)」と語る。もちろん、そのような働きかけの結果として、V.1で見えるように指示せずとも夫がゴミ出しできるようになる場合もある。Aさんは「結構言ったらなんでもやってくれるので、まあ、なんだろう、何をしたらいいかわからないっていうのがやっぱり多いんで、言ったらやってくれるって感じですね」という。妻の指示の

もとで家事や育児は遂行されている。

毎回のように指示することは「めんどくさい」わけだが、妻が自分で担ってしまうと自分の負担が増えてしまうことになる。そのことは、Dさんの「言ってる方がめんどくさいなどか思って結構自分でやっちゃったりすると、自分の負担が増えてストレスだなーと思うときは結構子どもいないときからありましたね」という語りからも読み取れる。だからこそ、Dさんは「結構自分もあきらめて、あなたの仕事だよっていつてわざとやらないようにしたりしてました」とあえて夫に指示を続けている。このように、一見夫がしているように見えても、妻の毎回の指示という活動によって遂行されている側面が浮かび上がる。

(3) 夫が行う家事の後処理

夫が家事などを遂行している背後で、妻による潜在的な後処理などが存在する。例えば、Mさんのような場合である。Mさんは夫の家事を「めっちゃくちゃやってくれる」と高く評価しているが、実のところ、以下の語りにもみるように潜在的な活動が行われている。

家事に関しては、細かいところはいっぱいあるんですよ。洗い物もめっちゃやってくれるんですけど、気づいたらやってくれるし、それに甘えてわたしもやってくれないかなって思いながらほったらかしたりする部分もあるんですけど、お皿のこっち側だけ洗って反対全然あらってへんとか、見たら汚れ落ちてへんとか、あとお風呂上がりには、洗濯物身体ふいたあとのタオルってちょっとぬれてるじゃないですか。あれを(干さずに)かご入れたら、他の洗濯物カビるやんとかあるんですけど、そういう細かいところは見ないふりをしてそっとタオル出して、かけて干して、やって。お皿のことに關しては洗ってくれてるので、文句言ったら洗ってくれへんようになるかもしれんし、あまりにちょっと汚れが残って

るときはこっそり自分で洗い直すんですけど、それ以外は目をつぶってる感じですね。

このような語りから分かるように、妻自身が後処理を行うことによって、夫が家事を「めっちゃくちやってくれる」状態が維持されている。

以上より、夫が家事を行う際に、妻の潜在的な活動によって成り立っていることが分かる。それは事前の準備であったり (IV.1. (1)), 直接的な指示であったり (IV.1. (2)), 後処理であったりする (IV.1. (3))。

2 育児に関係する潜在的な活動

(1) 出産時や出産後を見越した夫との関わり

今後の育児をすでに見据えて夫に協力を依頼している活動もまたとらえられる (B, C, D, K, M, N)。

Kさんは第一子の妊娠中であり、出産後のことについて話し合っていない。「私が1人でしゃべってて、これやってな、あれやってな、みたいなめっちゃあの事前にアピールしてるみたいな。むこうはまあ、はいはいみたいは聞き流してるみたいな感じ」だという。具体的には「育児に関しては夜、土日とか、夜、明日休みのときとかは、たまに夜めんどうみてもらうのと、お風呂入れてね、みたいな、すでにもうアピールしてる」。「夫さんがご自身で関心もって、なにか見たりとか読んだりしてる様子とかはありますか?」と問うと、「一切ないですね。一切ないんで、こう一緒に茨木市でやってるパパママクラス参加してみたり、エコーのDVDとかみせたり、アピールしてる。いま動いたよってお腹触らせてみたり」と答えた。つまり、妻が夫の関心のなさを感じるがゆえに、夫に父親としての自覚を持たせようと「アピール」する活動を行っていることが分かる。

このように初めての妊娠であるがゆえに、先を見越して夫に子育てへの興味をもたせようと

したり、参加を促すような細かな活動がある。Kさんほどは意識的ではないにせよ、Bさんのように「たまごクラブ、本を私もはじめて読んで買って置いてたら、めっちゃ見てくれてたりしてるんで、あ、よかったーって。ちゃんと思ってくれてるんやなーってというのがあったんで、はい」という場合もある。また、Mさんの夫が、「俺、子どもできたらかわいいと本当に思えるんやろうか」という不安を抱えている中で、Mさんが「何人か赤ちゃんに会いにいったら、そのうちの一人すごい私と仲が良い友達がいるんですけど、旦那さんも仲良くしてもらって、その子のことはかわいいと思えたらいいですよ」と語るように、不安に思う夫に赤ちゃんに触れさせる機会をもつというような、出産後を見越した活動を行っている。

このような活動は、第一子の妊娠だけに限られない。第二子を妊娠しているDさんは、第二子が生まれた際、さらに育児に手がかかることを見越して、夫に「だからなんか自分の負担が大きいなーってちょっと感じて、(感じ)つつあるところで。結構毎日のように、『こんなもう1人おったら困るよ』とかいって、毎日のように言っているんですけど」とアピールしているさまが分かる。第二子を妊娠しているNさんは、家事について夫のサポートを期待してないという状態ではあるが、「まあでもこの1人目の方をちょっと積極的に見てもらわないとあかんのかなっていうのと。下の子が泣いてるときとか休みの日はもうだっことかそういうのはしてもらいたいなって感じですかね」という。つまり、自分の負担を軽減するためではなく、子どものために、夫に「育児とかお世話のこととかで文句じゃないですけど、もうちょっとこれしてほしいとかそういう話」をするようにしている。

Cさんは、出産時に3歳の娘の預け先に困っている。具体的には、「いま不安なのは、出産と

産後どうしようかなって。出産のときにこの娘と、分娩室、陣痛室とかと一緒に（娘が）入れないみたいで。主人しか入れないので、時間帯によって誰に預けるか」と心配していた。産後の入院期間における娘（3歳）の世話を友人や妹に頼もうと、夫に相談しており、夫に協力を依頼している。特にCさんは、夫が娘の食事を準備することができるのかという懸念も抱いていた。しかし、夫は「知らん人に頼みたくないみたいなの雰囲気出してたんでどうしようかなって思ったり」という状態で「せめて、夫が定時で帰ってきてくれるとか、2週間休みとってくれていうなら、まだね。こっち（病院から自宅に）帰ってきたら心強い。強くもないけど……家事全然しないからどうせ（食事を）買ってくるんやと思うんですけど。それでも娘の相手をする、してくれる人がいると思うのと、いないのでは違う」と、自分が子どもを世話をできない時の夫の様子まで考えていたことが伺える。

これらの語りから浮かび上がることは第一子の妊娠の場合は、夫が子どもの存在に興味をもつように妻が働きかけること、第二子以降の妊娠の場合は、すでに存在している子どもの育児があるため、事前に夫にアピールしていることが分かる。つまり、妊娠期や出産後に、実際には夫が多少なりとも育児や家事のサポートを行うのかもしれないが、それらは夫が自主的に担うばかりではなく、その背後に、妻が妊娠中から行うアピールや先を見越して夫にその内容を共有する相談といった活動がある。

(2) 父親の育児をうながす配慮

IV.1 (1) では、出産前に夫にアピールしたり、出産後を見越して夫と話し合ったりするような活動を見た。次に、第二子以降の出産において、すでにいる子どもと父親としての夫の関わりそれ自体が円滑にいくように、妻が子どもの様子

を夫に伝えたり、子どもとのかかわり方を調整したりしている様子を見ていく（D, E, Q, V）。

Qさんは、幼稚園の送迎時に担任の先生から聞いた子どもの幼稚園での様子、たとえば友達を怪我させたことや歌を頑張っていることを話したり、『昨日こんなんやったよ』って写真見せたり」と子どもの日々の様子を夫に伝えるようにしている。

Dさんは、仕事に復帰してからは父も母も同条件であるにも関わらず、子どもが母親を頼ることについて、次のように考え、工夫をしている。「最近ママママってくるのは、やっぱりその（夫の）関わりが足りないってなんとなく思うんですね。（夫は）結構、スマホ片手にちょっと…子どもが起きている時にスマホをよく見ているとか、そういうところも原因なんかなって自分ではちょっと思ってた、単にママが好きじゃないうちの子が起きている間はスマホ禁止ってやって（手でパンとたたき音を伴って）ばんってやってほしいってしたりとか。まあ、『いやいや』ってなっても無理やり寝かしつけに行ってくれとか、ちょっと無理やりむこうに、夫に、関わる時間を増やすようにしたりはします。で、夫に相談とかどうしていくとかはあまりしてないです。もう強制的に、『はい見て、はい見て』っていう感じで、（夫が子どもを）見れるようにはしてますね」と語る。

さらに、Vさんが「(学習系の習い事について) 何がいいかなーもたぶん私が情報収集してきてどう思うー？みたいな。『それでいいと思うで』とか。習い事とかも『向いてるのはこんなんちゃう？』みたいな最終決定をお願いしてる感じですかね」と語るように、夫が育児に関わっているように見えても、その背後で、妻の配慮や働きかけといった潜在的な活動が存在していることがわかる。

V 潜在的な活動の帰結と変化

IVでは、妻が家事・育児に関して、準備や指示を行ったり、夫の協力を促すような潜在的活動が行われていたことを確認した。Vでは、そのような活動がどのような帰結をうむのか、またはどのような意味があるのかを、さらに見ていく。

1 夫の変化

潜在的活動の結果として、妻が夫や夫婦関係の変化を語る場合がある (A, K, C, G, H)。

(1) 気づきと自主性

本節では、妊娠や出産を契機として、またはIVで提示した様々な潜在的な活動の結果として、夫にどのような変化が見られたかを検討する。夫が変化したとする類の語りからは、例えば、一緒にやる、教えてもらうことなどを通して、スキルを習得する場合や、妻に何度も指示を繰り返されるうちに行けるようになる習慣化があげられる。

まず、妊娠を契機に夫が変わることからを見ていこう。例えば、Gさんは「妊娠してからは今旦那が結構わりと食器洗ってくれたりとかお風呂掃除してくれたりとかそういうのはやってくれるようになりましたね」と語る。

Kさんも同様に「特には、うん、最近より協力的になってきたところがありまして、ご飯食べたあととか、なんも言わなくても片付けとかちょっとし始めた。なんと。ちょっと（語りの中に夫のいい所として）加えておいてください、片付けもフフフ。なんかあの、わたしがコンロのところとかこうふいてると、『そんなやつたら俺に言ってくれたらいいで、やるで』みたいな。しかもはや『なんでお前動いてんねん』ぐらいの感じで、『ゆってや』みたいな感じと言われる」ようになり、徐々にサポータティブな関

係に変わっているという。

また、Kさんのように、結婚後共に過ごしてきて、妻に指示をされているうちに変化した場合もある。「たぶんゴミ捨てとかももうゴミ捨て今日ゴミの日やなっていうの、たぶんそろそろ、わかってくるかなぐらいの感じ。なんか前、『今日ゴミの日やからよろしく!』って言ったら、『ペットボトルも出しとくのでいい?』みたいな返ってきて、『おお! よう気づいたな、今日ペットボトルの日やで!』みたいな…感じなんで、だからまあまあ徐々になくなって感じですね。だからもうなんも言わなくてやっといってくれることは宅配サービスの取り入れですかね」と夫が徐々に覚えていく様子が語られた。

こうした「夫の変化」は程度の問題がある。例えば、「家事は、(夫は) 正直一切しないですね」と語るCさんは、「育児は、最近ちょっとマシになっておむつかえてくれたりとか、お風呂入れてくれたりしますけど、基本やっぱり仕事してるんでそこまで昼間とかは関われない。土日とかに一緒に遊んだりとか、ですかね。ご飯つくったりとか食べさせるっていうのはあんましない」というように「マシになる」程度の変化の場合もある。本項で見たように出産に至るまでの期間の活動や妊娠を契機として夫が変化するという場合があることは夫の家事・育児への積極的な参加の現れともいえるかもしれない。

(2) 夫婦関係の変化

本項では、V.1. (1) で見たような気付きや自主性を獲得する夫の変化によって夫婦関係も変わってきたという語りを見ていく (A, P, W)。

例えば、Wさんも「子ども生まれる前は個人個人で生活していたんですけど、ちゃんと子どもに食べさせないかんから、ちゃんとご飯作るとか部屋きれいにするとか。そういった面で、こうお互いやっちゃんと生活の意識が高くなったんで、よりこう、一緒に暮らしていく、ちゃ

んと生活をつくっていく人みたいな目線が増えた気がします。旦那に対しては（略）うーん、まあまだまだですけど。ちょっとずつ」と言うように、妊娠を契機に、自身や夫のとらえ方が変化している様子が分かる。

Aさんも、子どもが生まれる前は夫に対して友達だという感覚があったというのが、子どもが生まれてからは「旦那は子どもの1人」ではなく自律した大人として行動してほしいと思うようになった。その上で、第二子を妊娠中の現在、「いまだいぶなんも言わなくても、わたしが料理してたらお布団、寝る用意してくれるとか。分担は、阿吽の呼吸でできてきてるかなっていう形」と変化を語る。

Pさんが夫との関係について、「やっぱり夫に対して育児にこうしてほしいみたいなことすごい思うし。それを産後生まれてすぐ寝れてない状況が続くなかで結構ばーってあったりとかして。夫婦2人のゆっくりした時間はなかなかとれなくなって、ゆっくりしゃべれなかったり、夜泣きがあったりとか、あんまり寝ない子だったので、そういうのもあって。なんかこう結婚したてのころとはやっぱり全然違うな」と語るように、結婚初期から妊娠・出産を機に夫婦関係が変化していることが分かる。

大野（2016）は、夫が「家族であること」から「家族すること」への変化を指摘する。それらは、「男性性を相対化すること」や「男性の発達」に含まれるが、妊娠や出産が契機になっていたり、妻との相互行為によってそのような「学習」自体がなされていたりする可能性が浮かび上がる。

2 変化しない夫

V.1で提示したような妊娠や出産を契機にした夫の変化がなかったり、役割が固定されたりするありようもまたとらえられる。

(1) 固定化される役割

結婚後、妊娠に至り、場合によってはすでに子育てをしている中で、妻の潜在的な活動の結果として夫が変化する有様を見てきたが、他方で、夫が変化しないことや役割が固定化される場合もある（I, L, K, W）。その際に、妻が諦めたり、合理化したりするような語りが見られた（J, N）。

Lさんの次の語りからは、妊娠を機に変わると思われていた夫が変わらなかった姿が分かる。「子どもが生まれたら変わってくるのかな、人って変わるのかなって思ったけど、全然変わらないもんなんだなってことがわかり、察しろよっていう空気出しても察してくれず」その結果、「じゃあもうすごい子ども扱するわけじゃないけれど、具体的に言って。新入社員に言うように言ってそれはやってくれるみたいな状態にはなあって、うーんなんか...なんか腑に落ちへんけどしゃーないなって感じ」というように、夫が気づかない場合（妊娠などを機に変化しない場合）、IV.1.(2)で提示したように妻が夫に指示をし続けるしか方法がなくなる。

またはIさんのように、「その都度できる人がやる」という結婚当初の約束があるものの、妊娠を機に時短勤務で働いているため、「ほぼわたしになってくるっていう」と妊娠でかえって役割が固定化される様が伺える。さらには、「キッチン系、料理と洗い物は絶対しないです。」という夫は、「結婚したてのときに（妻が）一回油を注意したことがあって、油のこってるときあるからこれ頑張って洗ってなって言ってしまったのでそれから、（夫は）『おれ洗い物は苦手や』って、言って。年に1回結婚記念日のときだけ料理します。それだけです。あと洗濯とか掃除とかもまあまあおるときはやってくれる」と家事内容が夫の得意不得意も合わさって固定化される。

Rさんも共働きであったが、「片付けとか洗濯

とかが得意じゃないので。あと、多分ここまでたまたまやらなきゃっていう基準が違うんです。まだ大丈夫っていうか。まだ大丈夫だから手を出してないんだろうけど、私は限界だからすぐ手を出す感じで、気づいたら洗濯はいつもわたしがやってない？みたいな」と夫との基準が異なることによって固定化されることもあった。

Wさんも「うーん、食事が主人があんまり上手に作れないので、そこ、結構私食事作るのが結構めんどくさいなって思うのでそこが今もどうしたもんかなとは思っています。」と言い、「離乳食はたぶん作ったことないと思いますね、旦那は」と語るように、このような家事の得意不得意によって固定化されている。

同様にKさんの夫も「まあお風呂掃除するのとかたまに言えばやってくれる。なんか洗濯物をたたむ、のは絶対やらへん」状態である。「なんか（理由が）あるんですか」と聞き手が尋ねると「なんか苦手なんですよ。たぶん、きれいにたためないとかがたぶんあるんで、やらへん。やらへんし、多分わたしも気になってたたみ直したりしてしまうから、それはまあまあ（しかたがない）」と語るように、夫が苦手であることが理由になり、結局役割が固定化される。

(2) 妻のあきらめと合理化

夫が変化しない場合は、妻自身がその状況に適應するような語りが見られた。これらの語りの女性が、必ずしも、夫に否定的な評価につながるわけではない。そこには、「期待していない、苦手だから、夫は仕事など忙しいから」など理由が付け加えられる。もっとも、それは諦めていたり、合理化したりしていると捉えることもできる。

例えば、夫からの協力がほぼゼロであるというJさんだが、「もういいかなって思っています」と答える。その理由として、自身の「体調がし

んどいときにヘルパーさんを使ったりという面で夫がサポートし（実際に家事をしているのはヘルパーだが、夫がそれを承諾しているという意味で）、それでわたしが楽になったので、実際になったので、まあそこまで言うことじゃないかなとは思ってますね」と語っている。

Nさんは育児に関しては夫に依頼するが、「家事に関しては言ってもどっちかという機嫌悪くなるから、こっちの方が、その方がめんどくさいんでそっちは言わないですね」と言わないようにしているという。その背景には、「専業主婦やし、そこまできつくも言えないかな」という理由があるが、正直なところもうちょっと（子どもの）お世話とか、できれば掃除とかも手伝ってほしいなっていう感じ」とも内心思っている。

他にも、Mさんは「他のお友達の話とか、テレビの話やったりみてる、うちの旦那さんはだいぶやってくれる方だなって思ってるので、言わなくても全然やってくれますし」と答えたり、Eさんのように、夫の家事が、「お風呂1回か2回くらいは洗ってもらった」という程度であっても、「もともとやっぱり九州の方の出身だから、女の人が家事をするのが普通で育てきたから、基本、しないでもらう、というか、それで結婚してからそれできちゃったから、うーん……」と言うように考えているさまも見られた。同様にCさんは自身の体調のこともあり、「しんどいついていったときに、土曜日洗濯せずにおいてたら一応洗濯はしてくれてましたけど。うーん、なんか申し訳なくって、（洗濯を）3回くらいしてもらって、まあいいやじゃあやるか、みたいな。しんどいけどやるかみたいな」感じになっている。

結局、夫の「お膳立て」を行わないと妊娠期、出産後などに妻にその負担が返ってきてしまう。だからこそ、特にIV.2.(1)において検討したように、二子以降の場合は、妊娠に至ってからも夫の家事や第一子の育児を促し、支える様々な

潜在的活動が存在していた。しかし、その活動にあまり効果がない場合に、このような周りとの比較した合理化や納得という状況が存在している。分担に満足しているという回答をしながらも、その説明づけの中には家事・育児分担の現状や夫に対する不満や諦めが読み取れた。これは、末子が0～3歳までの子どもを持つ母親120名を対象としたワーク・ライフ・バランスに関する調査結果の特徴（青木 2019）と整合的である。

VI 結論

本稿では、妊娠期・育児期の女性を対象として、家庭内の再生産労働の実態を妻が行っている潜在的活動という観点から検討してきた。その結果、妻は妊娠期以前から夫の家事遂行の下準備や夫への指示、夫が行った作業の後処理を通じて、第二子以降の場合は、すでに生まれている子どもの育児を視野に入れた指示や配慮、というように、様々な潜在的活動を行っていることが分かった⁵⁾。

これらは、直接的に妻自身が行う家事・育児とは異なる。それは、夫や子どもといった他者の状態や状況を感知し、潜在的に行われる活動であり、夫による家事・育児が成り立つ前提でもあった。

このような無数の活動の結果として、夫の家事・育児への参加と協力が促進される。もちろん、その活動の積み重ねによって夫が変化する場合もあれば、それでも変化が見られなかったり、女性自身が適応や合理化をしているさまも浮かび上がった。すなわち、生活を共にすることで、夫婦双方に「変化」が見られる（V）。変化は現

在の差（不平等な分担や互いに納得のできる満足）に至るまでの過程において起こっていた。妊娠期・育児期といった結婚した後の早期の育児期は、そのような変化が起りやすい時期であることが推測できる。先行研究（青木 2019, 高山 2020）では、妻が潜在的活動を行うようになる変化／夫が家事・育児に参加するようになる変化について十分に言及されてこなかったが、本調査から、妻の行う多くの種類の潜在的な活動によって夫が家事・育児をしているように見えること、さらにこうした妻の活動によって妊娠期や育児期を境に夫が協力的に変化する可能性を描き出した。もちろん、こうした活動によって夫が変わりうることを提示したが、結局のところ夫が妊娠や出産を機に変化するかを検証したわけではないことは本稿の限界である。しかし、少なくとも本稿からは、夫が独立して変化しているのではなく、結婚後、妊娠に至るまで、そして出産後の育児の中で、妻の予期的で潜在的な活動の結果として、夫が変化しているという動的な一面が見られた。

家事や育児に関する妻の語りを検討した本稿の知見からは、妻による準備や指示、配慮といった潜在的な活動による働きかけによって夫の家事・育児が推進されるという新たな仮説が浮かび上がる。これまで家事分担は次のような仮説のもと実証研究が進められてきた。それは、子どもの年齢や人数によるニーズ仮説や、夫婦の収入格差や学歴によって決まる相対的資源仮説、妻の就労形態や夫の帰宅時間などによる時間的余裕仮説、性別役割分業意識によるジェンダーイデオロギー仮説がある（乾 2016: 299）。また、家族に適応していく変化が男性の発達として研究されてきた（大野 2016）。しかし、こうした妻の働きかけが意味を持っていることを本稿からは指摘できる。加えて、「単に時間がある」「イデオロギーを内面化している」といったことに限られない、夫の家事・育児の役割習得として

5) 本稿では、専業主婦かそうでないか、という点にも目配りを行った。家事や育児の分担それ自体については、妻の就業形態も影響があるが、共働きであったり、夫とほぼ同じ学歴や職業に就いていたとしても、このような潜在的な活動が見られた。

の側面をも捉えることができる。

以上を踏まえると、夫なりの分担の努力や意欲があったとしても、「夫の家事分担を実現するためスキルの必要としない家事を夫に譲るなどという夫の家事の「お膳立て」を妻が請け負っている」とすれば、妻の分担が減るわけではなく、むしろ夫に家事を遂行できるよう別の負担が生じている」（青木 2019: 40）ことにもなる。さらには、そのような負担があったとしても夫に働きかけ、場合によっては夫に満足している現実があった。

妊娠期における再生産労働の内実と過程を検討した本稿の課題は、一時的な変化をとらえたに過ぎない可能性がある、ということである。妻の働きかけによって、妊娠期や育児期初期に夫が変化したとしても、またその期間が終わったら元に戻る可能性も考えられる。

夫による家事や育児の分担を増やすとき、「夫に育児分担を交渉する際の妻の発言力を高めること（妻が経済力を持つこと）」（大和 2008: 16）や同時に「女性自身が家庭責任を相対化すること」（中川 2009）が重要だとされてきた。ただ、妻からの働きかけが夫の家事・育児参加を促している可能性があるという本稿の知見は、女性が夫への指示や伝達を多くするという解決策を意味していない。むしろ、このような夫が育児や家事を遂行するまでに費やさなければならぬ別の負担—それは見えにくいのだが—をいかに減らしていくかが重要ではないだろうか。

引用文献

青木弥生（2019）育児中の夫婦における家事育児分担とその評価—妻は夫婦の家事育児分担をどのように説明づけるか？ 子ども教育宝山大学紀要, 10, 33-40.

De Vault Marjorie L. (1991) *Feeding the Family: The Social Organization of Caring as Gendered Work*. Chicago: University of Chicago Press.

Hequembourg A. and Brallie.S (2005) Gendered stories of parental caregiving among siblings. *Journal of Aging Studies*, 19, 53-71.

平山亮（2017）介護する息子たち—男性性の死角とケアのジェンダー分析. 勁草書房.

Hochschild, A., R. and Machung, A. (1990) *The Second Shift: Working Parents and the Revolution at Home*. New York: Viking. 田中和子（訳）（1990）セカンド・シフト：第二の勤務：アメリカ共働き革命のいま. 朝日新聞社.

伊田久美子（2012）再生産労働概念の再検討—構造調整プログラムを中心に. 女性学研究：大阪府立大学女性学研究センター論集, 19, 112-129.

乾順子（2016）有配偶女性からみた夫婦の家事分担. 稲葉昭英・保田時男・田淵六郎・田中重人（編）日本の家族 1999-2009—全国家族調査 [NFRJ] による計量社会学. 東京大学出版会, 295-310.

Komter, A. (1989) Hidden Power in Marriage. *Gender & Society*, 3 (2), 187-216.

Mason, J. (1996) Gender, Care and Sensibility in Family and Kin Relationships. Holland, J. and Adkins, L. (eds.) *Sex, Sensibility and the Gendered Body*. London: Macmillan, 5-36.

松田茂樹（2016）父親の育児参加の変容. 稲葉昭英・保田時男・田淵六郎・田中重人（編）日本の家族 1999-2009—全国家族調査 [NFRJ] による計量社会学. 東京大学出版会, 147-162.

永井暁子・松田茂樹（編）（2007）対等な夫婦は幸か. 勁草書房.

中川まり（2009）共働き夫婦における妻の働きかけと夫の育児・家事参加. 人間文化創成科学論叢, 26, 305-313.

滑田明暢・サトウタツヤ（2013）家事と稼ぎ手と育児役割実践の理解—類型による役割分担の形態と心理的評価の包括的検討. 立命館人間科学研究, 26, 63-75.

岡未奈・佐々木睦子・石上悦子（2019）パートナーからの情緒的サポートに対する産後1か月の初産婦の思い. 香川大学看護学雑誌, 23, 1-10.

尾曲美香, 2014, 共働き夫婦における新家事労働 —保育所入所手続きを事例として—, 人間文化創成科学論叢, お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究, 247-255.

大野祥子（2016）家族する男性たち—おとなの発達とジェンダー規範からの脱却. 東京大学出版会.

妹尾麻美, 孫怡, 他9名（2020）「いばらきコホート

- 調査」における調査設計と概要. 日本保健福祉学会誌, 26 (2), 5-16.
- 孫詩彧 (2019) 家事育児の分担に見る夫と妻の権力経験—育児期の共働き家庭の事例を用いて. 家族社会学研究, 31 (2), 109-122.
- 杉原喜代美・高橋千晶 (2013) 妊娠期にある女性の背景要因が睡眠感, 疲労感に及ぼす影響. 看護学研究紀要, 21-27.
- 鈴木富美子 (2016) 育児期のワーク・ライフ・バランス. 稲葉昭英・保田時男・田淵六郎・田中重人 (編) 日本の家族 1999-2009—全国家族調査 [NFRJ] による計量社会学. 東京大学出版会, 187-202.
- 高山順子 (2020) 子育て期の共働き家庭における家事分担の困難と家事のマネジメント. 家族研究年報, 45, 61-78.
- 巽真理子 (2018) イクメンじゃない「父親の子育て」. 晃洋書房.
- Thiele-Wittig, M. (1992) Interfaces between Families and the Institutional Environment, Leiden frost, N.B. Edit., Families in Transition, *International Federation Home Economics*, 169-175. 家庭経営学学会 (訳) (1995) 家族と生活関連の諸機関との相互関連, 転換期の家族. 産業統計研究社, 254-266.
- 筒井淳也 (2011) 日本の家事分担における性別分離の分析. 田中重人・永井暁子 (編) 第3回家族についての全国調査 (NFRJ08) 第2次報告書第1巻: 家族と仕事, 55-73.
- 筒井淳也 (2016) 夫婦の情緒関係——結婚満足度の分析から. 稲葉昭英・保田時男・田淵六郎・田中重人 (編) 日本の家族 1999-2009—全国家族調査 [NFRJ] による計量社会学. 東京大学出版会, 23-45.
- 筒井淳也・竹内麻貴 (2016) 家事分担研究の課題—公平の視点から効果の視点へ. 季刊家計経済研究, 109, 13-25.
- 内田哲郎・斐智恵 (2016) ワーク・ファミリー・コンフリクト. 稲葉昭英・保田時男・田淵六郎・田中重人 (編) 日本の家族 1999-2009—全国家族調査 [NFRJ] による計量社会学. 東京大学出版会, 311-327.
- 大和礼子 (2008) 母親は父親にどのような「育児」を期待しているのか. 大和礼子・斧出節子・木脇奈智子 (編) 男の育児・女の育児. 昭和堂, 115-135.
- 付記：聞き取り調査にご協力くださった女性に感謝を申し上げる。加えて、プロジェクトの運営に携わる先生方、研究員の方に御礼申し上げます。本研究は、立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構 (R-GIRO) のプロジェクト「シームレスな対人支援に基づく人間科学の創成」(プロジェクト代表・矢藤優子) の一環として R-GIRO の助成を受け実施した研究課題である。調査に当たっては、立命館大学研究倫理委員会の承諾を受けた (衣笠_人_2017_5)。

(受稿日：2020. 6. 30)

(受理日 [査読実施後]：2021. 2. 12)

Original Article

Details and Process of the Latent Activities of the Wife Regarding Housework and Childcare: A Survey of Women during Pregnancy and Childrearing

MISHINA Takuto, SENOO Asami and YASUDA Yuko

(Graduate School of Human Science, Osaka University / Faculty of Culture and Information
Science, Doshisha University / College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University)

In this study, we focused on the facts and processes of how activities such as childrearing and housework are actually performed at home and examined them based on an empirical survey. While the involvement of husbands and fathers in housework and childcare has been promoted, an imbalance in the state of housework and childcare still exists. Housework and childcare are primarily carried out by women, but it is easy to imagine that their difficulties and conflicts increase during pregnancy and early childhood. In this study, we conducted interviews with pregnant and childrearing women live in Ibaraki city and used the data from 23 of them. As a result, the reality of the latent activity of the wives was revealed even when the husbands appeared to participate in housework and childcare. For example, they not only prepare and instruct their husbands for domestic work but also do the “post-work” for their husbands. They have to request their husbands’ help both in anticipation of giving birth and at the time of giving birth. In addition, they have to encourage the childcare of existing children. In carrying out such activities, the stories of wives tell us that husbands are only gradually becoming more aware of the work of childbirth and childcare.

Key Words : pregnancy, women, housework, childcare, latent activity

RITSUMEIKAN JOURNAL OF HUMAN SCIENCES, No.43, 1-16, 2021.
